

2012・3 年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
神戸学院大学地域研究センター主催講演会

精神科医の子育て論 I・II

いつもの暮らしがたから：無限の可能性を秘めて
乳幼児期・児童期・思春期を考える

服部 祥子

大阪人間科学大学名誉教授



地域女性のエイジングを支援するための問題提起
主たる研究者：人文学部人間心理学科 前田志壽代

1. 子どもが育つみちすじく乳幼児期は人生の第一幕

2. 心の発達過程 (0～5歳) ～いつもの暮らしのなかで

(1) 乳児期 (0～1歳)

- ① 乳児の無力さの意味があるく果てしない可能性を秘めて
 - ② 母は子へ、子は母へく母子相互のかかわりのとうとさ
 - ③ 快楽 (欲求充足) の体験は「生きる火種」になるく基本的信頼感と希望を培う
- (2) 幼児前期 (1～3歳)
- ① 自立の第一歩く欲望や意志のめざましい発動
 - ② 受動的愛から能動的愛へく愛された子どもは他者を愛せる
 - ③ しつけと自律性く恥や疑いの体験もあってよい
- (3) 幼児後期 (3～6歳)
- ① 個の芽生えと反抗く独立心と依存心のせめぎあい
 - ② センス・オブ・ワンダーく「感じる心」の大切さ
 - ③ 遊びの効用く自発性と罪悪感のいずれもが大切

3. 親と子の向き合い方

- (1) 親と子は宿命的な出会いく無条件だからこそその喜びと切なさ
- (2) 自然の情愛と理性的興味く愛と知性という二つのチャンネル
- (3) 親の人生 子の人生く各々の独自性と道ずれとしての味わい
- (4) 森を見る目と木を見る目く社会の潮流 (全体) と個の持つ独自性 (個人) の双方に目を向けて